

外部知覚について

岡田正次

一

外部知覚、とくに、視覚的とみなされてゐる外部知覚、すなわち、我々が外界、外物を見る、という事態についての真相を考究したのであるが、その真相というのも、こういう外部知覚が、外界、外物そのものをそのまま知覚する、すなわち、いわば外界、外物そのものへ直接及ぶものであるかどうか、という点を中心として検討したい。

こういう観点から考察を進めるために、我々はどうしても、一般に、対象の意識の仕方について次の二通りの区別を仮定して、それぞれ別の言葉で表わす必要を感じる。その第一の意識の仕方は、意識が対象の实在そのものへそのまま直接に及ぶ仕方、対象の实在そのものをいわば意識の内に包みこむような仕方であり、他の意識の仕方は、対象の实在そのものを内に包みこまないが、対象を何らか意識するという仕方である。そして前者を直観という言葉でよび、後者を志向という言葉でよびた

い。これらの言葉をその種々の使い方から切りはなして、右の限定した意義に使用したいのである。右のような直観以外の意識をすべて一括して、志向という言葉で代表させたいのである。記憶、想像などの表象的なものは志向に属するけれども、しかし、それらだけに限るといふのではなく、要は、対象の实在そのものをいわば直接に内にもたない意識を一般に指すのである。

かくて、外部知覚についての我々の主題は、外部知覚は外界、外物の直観であるか、それともそれらの志向であるか、というように表現できる。

そこで我々は先ず、次のような考察からはじめよう。日常生活において、外物そのものが見えていると思われる場合にも、我々は種々の矛盾する現象に出会う。例えば、部屋の中に鏡台が見える。そしてまた、鏡台の前に坐る自分の姿も見える。こういう場合、この二つの外物の知覚のうち少なくとも一方は、我々のいうところの外物の直観でありえないことは明らかであ

る。鏡にうつる自分には、自分の存在はふくまれていない。それは自分の知覚ではあっても、その知覚自体には自分の存在そのものはふくまれていない。自分の志向にすぎない。この例に入るものには、池にうつった木立ちの風景、黒板にえがかれた立体図形、映画、テレビの映像など、ほかの様々の意識がある。これらの意識は、その意識自体としては、外物の存在の見せかけの意識にすぎない。そういう意味においては仮象の意識である。

さらに我々は次のような事態を觀察しよう。我々が日常外界を見る場合、我々には外界、外物の一部しか見えない。例えば、眼の前に街路を見るとすると、家並み、街路樹、通行の人々、車馬など、すべて見る自分に対する前面しか見えず、見る自分に対する側面、内部、背後などは見えない。前面も勿論外界の一部しか見えない。こういう場合、我々の意識の分類の仕方を厳密に適用するならば、外界、外物の見えていない部分は、それらの直観としては否定されることになる。見えていない部分の意識は、もしありとするならば、それらの志向であると言わなくてはならない。こういう主張は、もし外界、外物の見えていない部分の知覚がそれらの直観であるならば、即ち、外界、外物の見えていない部分そのものへ直接及ぶ意識であるならば、或る疑惑の念をよびおこすかもしれない。すなわち、一部にせよ、外界、外物そのものが直観されている以上、側面、内部、背後なども見えている部分と一体をなすものとして、いわば我々の直観内に存在するはずではないか、と。しかしやはり、我々の

厳密な立場は維持されねばならぬと思われる。何となれば、そういう考え方からゆけば、意識する、しない、の区別が成立しなくなるからである。見えている部分と客観的に関連しているから見えていない部分も直観されている、ということになる。客観的に関連するものはすべて直観のうちになくてはならぬ道理になるのではないか。それに、この疑惑は、見えている部分の知覚をそれらの直観であると前提したことから生じる疑惑であって、はたしてそれらの知覚がそれらの直観であるか否かは検討を必要とする事柄なのであってみれば、なおさら、直観、志向の適用の厳密さは保持される必要があるのである。

ついでさらに我々は、外界あるいは外物を見る場合の「外」という意味を考察しよう。この外というのは、単に、諸物が相互に空間延長的に外在しているという意味ではもちろんなく、また、見る自分と見られている諸物とが単に空間延長的に離れている、という意味でもない。この「外」とは、見る自分の興行的外という意味である。見る、ということと結び付いて成立するところの外である。こういう意味における興行的外の意識が、外界を見る場合の支柱であることは明らかである。

では見る自分に対する興行的外とはいかなる外であろうか。例えば自分の居る部屋の窓に不透明なカーテンをひいてみよう。すると、今までの窓から見えていた外部のものは見えなくなる。しかしながら、その窓といわば横につらなっている諸物は以前と同じように見える。さらに端的に、我々自身の眼を閉じてみよう。もちろんすべての外部のものは見えなくなる。

我々の眼がすべての外界、外物をそこから見るただ一つの窓であるかのように。こういう現象は、奥行的外とは、見る自分がそこを通して見るところの距離である、ということを考えます。そして、通して見るといふことは、自分が見透すその中間の諸部分相互に、またその向こうに見える外物とも、いわば重なっている、という関係を考えます。さらに次のようなことをも考えます。重なる関係であるから、その中間に不透明なものがあると、その向こう側が見えなくなる。通して見られる中間はかくて透明でなくてはならない。そういう意味においては、見透される中間の意識は、通常、いわゆる感覚的なものではない。それは色彩の不透明なものをおびていない。等々。

さて、見る自分から相互に重なる関係にあるものとして意識されるとはいかなることであるか。重なる関係にある諸部分が相互に空間的に外在関係にあるものとして見えるならば、それはもはや重なる関係に見えるとは言えない。相互に空間的外在的に見える諸部分の間には、一方を通して他を見る、という関係が成立しない。そういう、見る自分からの、いわば縦の関係は成立しない。例えば、窓と窓を通して見られる外とが、窓と窓の横にあるものとの間にあるような空間的外在関係に見られることは不可能である。もし我々から見られるすべてのものが、相互に空間的外在的に見えるならば、見る自分からの縦と横との区別はつかなくなる。通して見る、という意識は成立しがたい。すなわち、重なりを通して見る、という意識は、重なる関係にある諸部分相互が、空間的外在的には見

えていない、ということの上になり立つのである。事実、我々の奥行的外の意識において、それらの部分相互の空間的外在関係は見えていない。極端な例でいえば、月や星などへの奥行的距離は空間的外在的には見えていない。そしてこのことは、近距離の事物の場合といえども、その本質において異なるところはないのである。

しかしながら、こういう考察に対して次のような疑問が生じる可能性がある。月や星の場合は別として、通常の外部知覚においては、奥行的距離そのものも見えていのではないか。例えば街路にしても、家並みにしても、ただ横につらなる部分のみが見えているのではなくて、それら自身が相互に奥行的関係に見えているのではないかと。この疑問が生じるのは、結局、奥行的斜面が知覚的にも見えていのではないかと、ということにあると思われる。単に横につらなる外物の部分相互が見えるのではなくて、それらの奥行的斜面の関係が見えている、ということに。たしかに、そういうように見えるから、我々はそういう意識を外部知覚とよぶのである。しかしながら、これを精確に点検するならば、いわゆる外物相互の奥行的斜面の関係は、それらだけで成立するものでないことがわかる。見る自分からの、奥行的斜面の関係にあると見える外物相互への、奥行的外を通すという見方が加わって、はじめてそこに、奥行的斜面の知覚が成立するのである。外物相互の奥行的斜面の関係と見えるものも、実は、見る自分からの奥行的外の意識と結び付いてのみ成立する。見る自分がそこを通して見るところの奥行

的外の意識を切りはなせば、外物相互の奥行的斜面の関係の知覚は、単なる横の関係の知覚に帰してしまふ、という事情がそこにある。こういうように観察するならば、奥行的斜面の知覚は、外物の感覺的な面の知覚と見る自分からの奥行的外の意識といわば融合したものである、と言わなくてはならない。

以上の考察からして、我々の主題である外部知覚の真相は明らかにはせられた。それは、すなわち、外部知覚とは外界の直観ではなくて、外界の志向であるということである。外部知覚が外界の知覚でありうるのは、見る自分からの奥行的距離の意識に支えられているからであるが、奥行的距離の意識は、上述のように、空間的外在的距離の直観ではありえないのである。何となれば、我々のいう直観とは、対象そのものに直接及ぶ意識、対象そのものの実在をいわばその内に包みこむような意識を意味するのであるから、もし奥行的距離の意識がその直観であるならば、奥行的距離は空間的外在的に見えていなくてはならなくなるからである。というのは、奥行的距離といえども、客観的な空間的距離としては、それらの部分相互は空間的外在関係にあると考えられるから。空間的外在関係にある諸部分から成立する客観的距離の実在そのものに直接及ぶ意識ならば、それらの外在関係がそのまま意識されねばならぬことになる。しかるに、奥行的外の意識には上述のようにそれが欠如している。先の例でいえば、月や星を見る場合、それがもし直観であるならば、月や星への莫大な距離もそのまま見えていなくてはならなくなる。そして見る人と月と星との距離の差異も、その

まま部分相互の外在的關係として直観的に成立するはずである。しかしそういう事実はない。かくみるならば、外部知覚はその「外部」という性格において、非直観的、志向的意識であると言わなくてはならない。

この主張に対して次の類のような抗議が提出されるとしたらどうであろうか。先の例において、鏡にうつる自分の姿は仮象であるとしても、鏡台の知覚は仮象ではないのではないか。それは単に見られるにとどまらず、手でさわることでもできるから。すなわち、鏡台は単に見られるにとどまらず、触覚によっても知覚されうるから、と。しかしながら、これを冷静に考察するならば、鏡台が触覚的にも知覚できるから、鏡台の視覚的な知覚がその直観でなくてはならない、という結論は出ない。鏡台の視覚的な知覚がその「外」という性格において志向であっても、鏡台の触覚的知覚と調和的に意識的に統一されるのである。何となれば、志向であるから鏡台が見えなくなる、ということはないからである。いずれにせよ、視覚的な外部知覚の真相、その直観性、志向性の問題の解決においては、視覚的な外部知覚そのものに即した考察が、第一に優先すべきことは論をまたない。

ところで、では、我々に見られる外界、外物が客観的に実在するか否か、という問題はどうかになるであろうか。上述のように、外部知覚がそれらの直観でないということになれば、外部知覚は外界、外物の客観的実在そのものをいわば内に包みこんでいないわけであるから、こういう意味においては、

外部知覚のいわば実在的な中身からは、むしろ外界、外物の実在は否定されるのである。外界の志向も、外界の何らかの意識であり理解であるという重要な一面をもつけれども、外界、外物の実在そのものをその内にふくむのではない。では、外界、外物の客観的実在はただ否定されるだけに終るのであるうか。そうではなくて、別の角度から改めて検討されねばならぬ道が成立する。それは、外部知覚に何らか対応する外界、外物の実在如何の問題である。外部知覚の直接の対象としての外界、外物の実在は否定されても、そのことがとりもなおさず外部知覚に何らか対応する外界、外物の実在の否定であるのではない。そして対応的な外界、外物の実在の問題は、働きとしての外部知覚の真相の問題と関連する。外部知覚は外界、外物の実在そのものへ直接及ばない、従って志向である、ということは、外部知覚をその対象の側から考察した真相であって、それは同時に外部知覚の働きをも、我々のいう意味での非直観的な志向の働きとして限定するけれども、しかしそれによって働きとしての外部知覚の全真相が開明されたわけではない。さらにいっそう具体的に、志向的意識としての外部知覚の働きの真相が問題とされ、その働きといわゆる外界、外物との関連も究明される、という重要な道が成立する。こういう研究方法を外部知覚の発生的立場からの研究という言葉でよぶとするならば、我々の外部知覚に何らか対応する外界、外物の実在如何の問題は、外部知覚の発生的立場からの究明にまたなければならぬのである。しかしながら他面また、このような発生的見地から、外

界、外物の実在が証明せられても、外部知覚が外界の志向である、という我々の考察には何らの変更も加えられることがない。外界、外物の客観的実在は外部知覚に何らか対応、照応するだけであって、外部知覚のいわば内に包みこまれるにいたるわけではない。そういう意味において、視覚的な外部知覚は、外界、外物の客観的実在の如何を問わず、外界、外物の志向にとどまるのである。

ところで、ここで我々はなお、以上の考察に次のような考察をもつけ加える必要を認める。それは我々の知覚的な意識は、これまで扱ってきたような外部知覚だけではないということである。我々は閉眼時においては普通外界を知覚しているけれども、例えば眼を閉じるならば、外界、外物は見えなくなる。しかしその場合にも視覚的な漠然たる印象は成立する。そしてこの視覚的な印象、感じにはもはや見る自分からの興行的外という意識はふくまれていない。見る自分から通して見られるという性格が欠如している。ここで自分ということにも少し触れざるをえない。自分ということは自意識なくしては現実的に成立しえない。自意識の全然ないところに現実的な自分は考えられない。そしてこの自意識と対象の知覚との関連の在り方に問題がある。閉眼時の漠然たるいまだ外物的統一にいたらない視印象と結び付く自意識は、いわば視印象とともにあるという感じを伴なう。それは感じる自分の意識である。ここに、見る自分ではなくて、感じる自分の特色がある、とすることができ。ほかの例でいうならば、触覚的な知覚にもこういう性格が強

い。我々は例えば手足の部分に温冷、硬軟などの触覚を感じる。その場合、そういう感じに伴なう自意識はやはりそういう感じとともにある、という感じ方が強い。これに対して、見る自分というものは、単に感覺的な視印象とともにあるとは考えられない。見る自分は興行的外を通して外界、外物を見ると意識される。しかし、見る自分といえども自意識なくしては現実に成立しえないとするならば、見る自分の自意識は外物の色彩的感覺と結び付くことも明らかである。見る自分は外物の色彩をも見るのである。しかし見る自分は、中間の興行的外の意識が欠ければ、感じる自分になるところである。色彩の視印象とともにのみ感じられる自意識になるべきところである。そしてまた、そういう感じ方も全然否定されているとも言いがたい。見る自分が外物の色彩へ及ぶという感じは、色彩の視印象とともにある自意識の感じ方と全く無縁でもない。しかしながら同時に、見る自分が、或は、中心的ともいべき自分が、離れている外物の色彩を見る、という意識の方が強い。ここに微妙な事態が潜在する。自意識が視印象とともにあるような感じがはっきり成立するのは、まだその視印象が外の志向と融合しない場合であって、外物の色彩を見るという場合は、すでに視印象が外の志向と融合し、それとともに、視印象が外物の色であるかの如く、そして自意識は見る自分、或は、中心的な自分の方にその座があるかの如き関係が成立するのである。そしてこの点が触覚の場合と異なるのである。触覚の場合にも、我々の日常生活においては、触覚とともにあるように感じられる自意識だ

けではなく、他の意識とともに意識的統一をうけるのであるけれども、その際にも、触覚とともに感じられる自意識が、中心的な自分の方にその座を移さず、依然として触覚とともにあるかの如き感じを強く残す。そしてこのことは、触覚およびその自意識の場として意識されるところが自分の身体である、ということとよく調和するのである。これに反して、外物の色彩とともに自意識があるかのように意識されることは、外物が自分の身体でないということと大きく矛盾することになる。以上の考察によって、見る自分とは色彩の視印象と結び付く自意識と外の志向との融合において成立する自分であるということができる。

これを要するに我々には興行的でない知覚も成立することが認められる。そしてこの非興行的な知覚の仕方と、外界、外物の實在の問題との関連がまた考察の対象となるのである。我々はこれまでの考察によって、外部知覚の直接の対象としては、外界、外物の客観的實在を否定したのであるけれども、非興行的な知覚については、それが直観であるか、志向であるかについてはまだ少しも触れていない。我々のいうところの感じられる意識、非興行的な知覚も感覺の知覚である。しかも感覺の多くは空間的延長性の意識を伴っている。閉眼時の視印象にも、手足に感じられる触覚にも空間的延長性の意識がふくまれている。従って、非興行的知覚がもし我々のいうところの直観であるならば、現実中存在する感覺的空間的延長そのものをその内にふくむこととなる。それに対して、その知覚がもし我々

のいうところの志向であるならば、感覺的空間的延長の實在はその内にふくまぬことになり、知覚のいわば中身からは感覺的空間的延長の實在は否定されるにいたる。そして非與行的知覚が直観である場合に、二つの見方が想定される。一つは、感覺的空間的延長は實在するけれども知覚とともにのみ成立するのであって、知覚をはなれては成立しないという見方と、もう一つは、感覺的空間的延長が實在する以上は、当然客觀的實在であつて、知覚とともにのみ成立する實在という如きは不合理であるという見方である。そしてこの第二の見方が正当であるとされる場合には、非與行的知覚からも客觀的な空間的延長の實在は明らかとなり、そしてまた、客觀的空間的延長の實在はすべて空間的世界の客觀的統一をなしていると考えられる以上、非與行的知覚による空間的延長の實在によつて、外界、外物をふくむ空間的世界の客觀的實在が明らかにされることになる。こういう意味において、非與行的知覚も外界、外物の實在の問題と結び付くのである。そしてこのことが、我々の知覚に、外界、外物の實在の問題において、何か或る優位めいたものが与えられる理由にもなつているのである。例えば、見る自分からは自分の身体も與行的外に見られる部分がある。しかし、身体はただ単に外に見られるのみならず、その各部に既述のような觸覺的知覚が成立する。見る自分の外に見られる身体が實在するという考え方は、外に見られる身体の觸覺に負うところが大きい。ということは、帰するところ、觸覺は客觀的空間的延長そのものの直観である、という考え方に支えられてい

外部知覚について

ると言わざるをえない。何となれば、もし觸覺も我々のいう志向であるならば、觸覺による空間的延長感も仮象的なものにほかならず、それによつて何ら客觀的空間的延長の實在は明らかにされないからである。尤も、觸覺が仮りに志向であつても、觸覺による空間的延長感に客觀的空間的延長が何らか対応する、という発生的見地からの究明が達成されるならば、客觀的空間的延長の實在の証明されることは、外部知覚の場合と異なるところはない。

これらの考察によつて、外界、外物の實在如何の問題については次のような考究の必要なることが示されたと言へる。すなわち、外部知覚が直観であるか志向であるか、さらには、非與行的知覚という意味での内部知覚が直観であるか志向であるか、の検討が必要であり、もしそのいづれにせよ直観であり、しかも客觀的空間的延長の直観である、ということになれば、それで外界、外物の實在も明らかにされるが、もしいづれかが、或は兩者ともに、志向であるとすれば、その志向的意識の發生原因の方から、外界、外物實在の問題を考究し実験する道が残される、ということである。

そして我々はこれまで、この論述の主題として、外部知覚の志向的性格を考究し、それを明らかにしてきたのである。

二

ここで我々是我々の主題とかわりをもつ範囲内において、パークレーとフッサールの思想を考察したい。主として、パー

クレーの視覚論、フッサールの現象学的還元論に即しながら。パークレーは視覚によって知覚される可視的延長と触覚によって知覚される可触的延長とを区別し、「視覚新説」においては、可視的延長のみを心の中に知覚されてのみ存在する延長とし、可触的延長は心の外にも存在する延長として扱っているが、「視覚新説」に続く「人知原理論」においては、可触的延長も同じく心の中に知覚的にのみ成立するものとしている。そして可視的延長は有限の可視的極小から成立し、可触的延長は有限の可触的極小から成立する。そしてこれらの延長の大小は、その中にふくまれるそれぞれの可感的極小の数の多少によって決定される、とする。「視覚によってとらえられる二種の対象があることが示された。それらの各々は、それぞれ違った大きさ或は広がりをもつ。一方のものは本来可触的なもの、即ち、触覚によって知覚されるかられるもの、そして視覚には直接に属しないもの。他方のものは本来的、直接的に視覚的なもの、その媒介によって前者が視野にもたらされるもの。これらの大きさの各々は点或は極小からできていて、その中にふくまれる点の多少に応じて、より大きく、或は、より小さくある。何となれば、抽象的な広がりについてどう言われようとも、感性的広がりは無限に可分割的でないことは確實であるから」。

(1) 可視的事物と可触的事物とは別のものであって、それら相互の遠近などを云々することは無意義なのである。そして距離（ここでは我々のいう奥行的距離のこと）は視覚によって知覚されえない。「距離はそれ自身が直接に見られえないとい

うことは、すべての人々によって承認されると私は思う。何となれば、眼へ真直ぐにむけられた線としては、距離は眼底にただ一点のみを投影するにすぎぬからである。その点は、距離がより長かろうとより短かろうと、不変に同一にとどまるから」。

距離は触覚によって知覚されるのである。「距離や触覚形態、固体性のような、触覚によって知覚できるところの或る諸概念が視覚の或る諸概念と結びつけられたことを永らく経験することによって、私は、視覚のこれらの概念を知覚する場合、習慣的な通常の自然の経過によって、どんな触覚的観念が伴いそうかを推定するのである。或る対象をながめながら、私は、ある程度の弱さと他の情況をもつところの或る視覚的な形と色彩とを知覚する。そしてそれは、私が以前に認めたことからして、私を次のように考えます。すなわち、もし私がこれこれの歩度或はマイルを前進するならば、私は触覚のかくかくの観念を生じるであろう、と。それであるからして、真実には、そして厳密には、私は距離自身をも、または或る距離に在る事物をも、見るのではないのである。私は言うが、距離も、距離におかれた事物も、それら自身が、或はそれらの観念が、真実に視覚によって知覚されるのではない。このことを私は私自身に関して信ぜざるをえないし、また何人であれ、彼自身の考えを入念に調べ、或る距離にあれこれの事物を見ると彼が言う場合、彼が何を意味するかを吟味する者は、次のことにおいて私と意見を同じくするであろうということを確認するのである。すなわち、彼が見るところのものは、或る距離を通過したのち

(そのことは、触覚によって知覚できるところの、彼の身体の動きによってはかられるのであるが)、彼は通常かくかくの触覚的観念を知覚するであろうという⁽⁵⁾ことを彼の理解力に示唆するだけである、ということ⁽⁵⁾を」。さらに、距離が視覚によって知覚されないのみならず、視覚によって直接知覚される視覚的延長といえども、日常生活においては殆ど注意されず、触覚によって知覚される延長、大きさなどが示唆されるのである⁽⁶⁾。そして可視的事物と可触的事物とは相違するものであるにもかかわらず、同一物の観念であるかのように混同され結びつけられるにいたるのである、という⁽⁷⁾。さらに「人知原理論」においては、「視覚新説」において認められていた外物の存在も否定されて、思考しない事物は、すべて知覚されたものとして心の中にのみ存在できると主張し、心の外の実在としての物質界は否定されている。従って、事物は自分、或はまた他のなんらかの被造的な精神の心に存在しないときは、それらの事物は全く存在しないか、もしくは或る永遠な精神、すなわち神の心のうちに存立しうる、と主張される。なお観念は受動、無力のものであって、或る観念が他の観念の原因になることはできない。能動者としての精神はそれ自身知覚されえないものである。しかし、我々の精神は有限であって、感官によって現実⁽⁸⁾に知覚される観念は自分の意志によっては創造されえない、そうした観念は他の精神、すなわち神によって産出されるのである。

以上のパークレーの考え方の中で、距離は視覚によって知覚されえないという主張は、この距離の興行的性格を十分につか

外部知覚について

み出していないとはいえず、きわめて注目に値する。そして我々の論述における外部知覚の志向的性格の考察は、パークレーのこの主張に示唆されて遂行されたものではないけれども、結果的にみて、彼の此の言葉を内容的に、具体的に展開し、根拠づけたという関係に立つものとみなしうる。しかし問題と思われるのは、パークレーが距離は触覚によって知覚されるというところである。触覚による知覚自身は、我々の考察によれば、むしろ非興行的知覚に属すると言える。この距離というのはいくらん単に延長の意味ではない。単なる延長ならば、視覚によっても直接に知覚できるというのがパークレーの考え方である。

距離とは見る自分からの興行的距離のことである。しかるに、触覚的知覚においては、その自意識は触覚ともにもあると感じられるのであって、その自意識と触覚との間に興行的外の関係の意識はない。興行的距離の知覚が成立するためには、こういう触覚の非興行的知覚だけでは不十分であって、その周囲世界の意識が加わる必要がある。しかるに周囲世界は現に触覚によって知覚されているのではない。知覚としては触覚は触覚のところにはしかない。ここにどうしても、中心的な自分からする外の志向の参加がなければ、外部知覚は成立しがたいのである。パークレーのいう触覚による知覚は我々のいう直観に属するところと解釈されうる。延長は知覚されて観念として心の中のみ存立しうるといふ彼の考え方は、この点において多分の曖昧さを残す。しかしながら、可感的延長が一定数の可感的極小から成立する、と彼がいう場合の如き厳密な考え方からすれば、観念と

してではあれ、延長は延長として心の中に存在する、ということにやはりならざるをえないのではないか。してみると、パークレーの主張は、距離の知覚は直観としての触覚的知覚だけで成立しうるということになるのであるが、実際はそうではなくて、非直観的な志向の参加なくしては、外部知覚は成立しえないのである。

次にフッサールについて。

フッサールはそれ自身具体的存在たる意識そのものと意識に對立する「アン・ウント・フュール・ジヒ」として意識された存在とはいかにして分離されるかを考察している⁽⁸⁾。そして、コグティオとしての知覚そのものの具体的な実的要素に属するものと属しないものとに分けている。物理学的な物が先ず排除される。それは知覚される世界に対しても超越的な世界であるから。しかしながら、知覚に対して現出する世界もまた知覚の實の要素ではない⁽⁹⁾。それは知覚と本質上關係されてはいても、知覚に対して超越的である。これに対して、色彩射映、形態射映などは感覺与件で、知覚の實の要素に属する。物の色、形態などは體驗としての感覺内容によって射映される。例えば、同一の色が色彩射映の連続的多様において現出する。感覺与件は知覚の具体的統一において、把握によって生化され、色、形などの現出とよぶところのものを形成する。「例えばいかなる知覚相にも、色彩射映、形態射映等々の或る一定内実が必然的に属している。それらは『感覺与件』に、一定類をもつ独自の領域の与件に算入される。これらの与件はそれぞれのかかる類の

内部において、該類の具体的な體驗統一（感覺の『野』）に結合し、さらには——ここでは詳しく述べられぬ仕方——知覚の具体的統一において『把握』によって生化されており、そしてこの生化において示現機能を行い、又は示現機能と一つになつて我々が⁽¹⁰⁾色、形態等々の現出」とよぶところのものを形成するのである。「見られたる物の色は、原理的に何ら色の意識の實の契機ではない。その色は現出する、しかしそれが現出する間、証示する經驗に際してその現出は連続的に変化しうるし、又変化せざるをえないのである。同一の色が色彩射映の連続的多様に『において』現出する。同様のことが感性的性質に対して、そして同様にすべての空間的形態に対しても妥当する。一にして同じき形態（同一なるものとして有体的に与えられたる）は連続的に常にまた『別の仕方』で即ち常に別の形態射映において現出する⁽¹¹⁾」。すなわち物は志向的統一である。それに反して、感覺内容そのものは射映によっては与えられない。體驗そのものは射映しない。「換言すれば、體驗の領域に属する存在者にとっては、『現出』、射映を通しての顯現、という如きものは全く何の意味もない。空間的存在がないところでは、種種なる立場から、変化する方位において、様々なその際現われる側面から、種々の展望、現出、射映にしたがって見る、ということ云々するのは正に何の意味もないことである⁽¹²⁾」。さらに、物の知覚は不十全的、一面的である。現実的に示現されたものの核は、必然的に、非本来的な「隨伴的所与⁽¹³⁾」として無規定性の地平によって把握的に圍繞されている。こういう世界

は、現在しているのではない、という可能性をゆるす。物の世界は推定的現実である。⁽¹⁴⁾

以上の一連の考察によつて、フッサールは、体験の領域から自然界をひきはなす推論の前提が下されたとしてゐる。⁽¹⁵⁾ そして、かくひきはなしても、能弁的直観において、物は、現出の多様の中に志向的統一として連続的に継続しつつ今と同様に我に現われてきうるのであらう、と言つてゐる。意識の存在、体験の流れは世界の撥無によつて変様されるが、その現存性は影響をうけない。⁽¹⁷⁾ 超越的世界は意識に依存するが、純粹意識はそれ自身完結したもので、時空的外在をもち、その中にもなく、物からの何らの因果的關係をもちけない。⁽¹⁹⁾ かくて、絶対的意識の全分野を残存、保持する見方を確保するために、現象学的還元を行なうのである。⁽²⁰⁾ 体験が、色が延長なくして考えられぬように自然と組み合わされてゐるならば、絶対意識の領域は残らぬが、そういうことはない。自然界を撥無することによつて何ものも失われず、意識の絶対的存在は、正しく解すれば、すべての世界的超越をおのれの中に蔵し規整する。少しのニュアンスも失われることがない。現象学的還元が現実の中から取り残しておくものにノエマが属し、實在的なものが意識される仕方が属している。しかしながら、エポケーによる変様はうける。自然界が撥無されても例えば樹の知覚はそのまま残るが、それはもはや単なる樹のように、焼いたり化学的に分解したりすることのできぬものである。⁽²¹⁾ 現象学的存在の流れは、材料的層とノエシスの層とをもつ。知覚物は体験の流れそのものには

属さず超越的である。体験の存在仕方は、反省という仕方で原理的に知覚されうることである。しかもこの内在的知覚はその対象、すなわち、ノエシスの層や材料的層の現在を必然的に保証する。内在的知覚の対象は十全的に与えられる。それに反し、物の知覚は不十全的である。一面的且つ不完全な現出にすぎない。このような不十全的にあらわれる現出の上に立つ理性措置は何れも最終決定的ではありえない。それは物の存在を最終的に保証するものではない。

以上のフッサールの所論において注目しなければならないのは、同一の物的なるものは、生化した感覚与件の射映の多様によつてのみ現出する、というところである。彼においても、いわゆる感覚内容、感覚与件は非常に微妙な、それだけに曖昧な難解なものとなつてゐる。彼の言葉によると、知覚体験中にヒュレー的契機としてふくまれているのは、例えば色の如き或るもの、感覚の色であつて、それ自身としては、ノエマ的ないし客観的な色ではない。また、三角形の形態射映にしても、それが空間的であつたり、空間において可能なものであつたりするのではない。⁽¹⁾ それらは体験なのである。意味を付与され生化されて、物的な色、物的な形態などを射映し示現するのである。フッサールのこのような考察は深いものをもつてゐると思われるが、この見方が正しいとするならば、物の實在をその直接的な意識関係から分離されても、物の知覚は成立する道理である。何となれば、物の知覚は、物自体の實在の直接の知覚、すなわち、我々のいう直観ではありえないから。物の色、物の

形など自体がそのまま直観されるのならば、それは感覺事件による射映とはいえない。また、射映の多様を通して、同一の物的なるものが現出するともいえない。知覚されるそれぞれの色、形がそのまま物の色、物の形の直観でなくてはならなくなる。逆に言つて、感覺事件の射映の多様によつてのみ現出する同一の物的なるものの知覚は、もはや物的なるものの直観ではありえない。こういう意味においては、物の知覚の直接の対象としては、物自体の存在は排除され否定されるのである。かく解するならば、フッサールの立場と我々の立場とは、外部知覚を志向的であると主張するかぎりにおいては、同一であるようにみえる。しかしそれにもかかわらずフッサールの考え方には一種の曖昧さが付着している。それは、知覚物を括弧に入れないならば、物の知覚の直接の対象としては、物の存在は完全に否定されねばならない。それは知覚的關係中に全然ふくまれていない。しかしながら物の知覚である以上、物の存在の志向はある。そういう意味で、ノエマとしての物を否定すれば、志向自体が成立しない。しかしその、知覚の直接の対象としての存在そのものは否定されなければならない。もし括弧へ入れられるとすれば、物の知覚の志向に何らか対応する物の存在の方でなくてはならない。直観的意識の直接の対象としての物の存在と、志向的意識に何らか対応する物の存在、という二通りの存在の区別に対して、曖昧な、或は消極的な、さらには否定的な態度をさえとする傾向のあることが、フッサールの思考にお

ける一つの特徴となつているのである。彼は写像説や記号説を悖理であるとし、我々が見る空間物は、それがいかに超越的であるにも拘らず、知覚せられたもの、即ちその有体性において意識において与えられたものであるとし、また、感官上の物と物理学上の物とを因果性²²によつて結びつけることは悖理である、と言つている。右の曖昧さは、彼の理性と現実に関する考察に際してもよく現われている。「直接に『見る』ということ、単に感性的な経験する見ることに限らず、いかなる種類であれ、原的に与える意識としての見ること一般は、あらゆる理性的主張の究極の権利源泉である。この源泉が権利を与える機能をもつのは、それが原的に与えるものであるからのみであり、又その限りにおいてのみである。……その供述のなされるのは何故かという問に対して『私がそれを見る』からという答えに、何らの価値を与えないということは背理であろう——このことをまた我々は洞見する。或は起こるかも知れぬ誤解をあらかじめ避けるため、ここに付け加えておきたいのであるが、今述べたことはしかし、事情によつてはひとつの見るということが他のひとつの見るということと相反することもあり、同様にもたまたひとつの権利ある主張が他のひとつの権利ある主張と相反することもありうる、ということ²³を許さぬものではないのである。何故ならば、右の如く言つてもそれは——ひとつの力が他のひとつの力によつてうち勝たれても、その力がもはや力ではないということの意味しないと同様に——見るといふことは何らの権利根拠でもないというような意味はふくんでいないか

らである。ではなくて上述のことは次の如きことを意味する。即ち、或る範疇に属する直観——しかししてこれは正に感性的に経験する直観を指す——においては、おそらく、見るといふことはその本質上『不完全』である。すなわち、見るといふことは原理的に強められたり弱められたりされうる、それ故に、直接の、従つてまた真の権利根拠を経験のうちにもつ主張でも、経験の進行につれて、経験の優勢な圧倒的な反対権利のために廃棄されざるをえなくなる、ということの意味する。「物としての実在者、即ち物という意味での存在は、原理上、孤立的現出においては唯『不十全的』にのみ現出する。これと本質上連関することであるが、右の如き不十全的に現われる現出の上に立つ理性措置は何れも『最終決定的』、『克服不可能』ではあり得ない⁽²⁴⁾」。このようにフッサールは、物の知覚は不十全的であるから、権利根拠ではあつても、最終決定的なものではない、と主張している。しかしながら、物の知覚が、我々のいふ物の直観ではなくて、物の志向であるならば、こういう志向は物の実在を知覚の直接の対象としてもたないから、物の実在に対する何らの権利根拠とはなりえないはずである。そういう物の知覚がいかにほど調和的に統一されようとも、それ自体としては物の実在の権利根拠となりうるものではない。何となれば、いくら調和的に統一されても、物の実在を直接の対象としてふくまぬことには変りはないからである。逆に、物の知覚が我々のいふ物の直観であるならば、仮りに物の一面の直観であつても、それは物の実在を保証するであらう。たとえ一面といへども、

外部知覚について

物の一面そのものの実在が直接に直観されているからである。物の直観ならば物の一面しか知覚されないということはある。一面しか知覚されないということが真である場合にのみ、一面の知覚が物の実在の権利根拠となりえぬことになるが、その代りこの場合は、そういう一面的な知覚の志向がいかにほど豊富化され調和されても、志向であるかぎり、物の実在の権利根拠になりうるということはないのである。そのためには、どうしても、こういう物の知覚の志向、およびそれらの調和的統一的な連関の、發生的立場からの考察、実験などが加わることが必要であり、その場合にのみ、それとの連関において、物の知覚的志向に何らか対応するところの物の、あるいは物の世界の、実在の権利根拠となりうる場合が考えられるのである。フッサールが、物の知覚は、一面的であつても、物の実在に対する権利根拠性を失うわけではないが、最終決定的な力はもたない、と主張するのは、物の知覚の直観性と志向性との区別、知覚的直観の直接の対象としての物の実在と、知覚的志向に何らか対応する物の実在との区別が、彼の思考の中で曖昧化されていることとあらわれであると解するほかはない。

以上の所論において示されたように、フッサールは感覚与件による物的なる色、形態などの射映を明らかにしているが、物の知覚、すなわち外部知覚の最も支柱となるべきもの、外部知覚をして外部知覚たらしめるもの、すなわち我々のいふ、見る自分に対する興行的外に関する考察が行なわれていない。もし

この興行的外の志向性が把握されるならば、物の知覚の志向性と直観性との区別において、志向性一本の明確な立場が堅持されねばならぬのである。(一)

G. Berkeley, An Essay towards a New Theory of Vision

(Everyman's Library) 1922.

- (1) Sect. 54, p. 36 (2) Sect. 49, p. 34
 - (3) Sect. 113, p. 65 (4) Sect. 2, p. 13
 - (5) Sect. 45, p. 32~33 (6) Sect. 74, p. 46~47
 - (7) Sect. 79, p. 50
- E. Husserl, Ideen zu einer reinen Phänomenologie und phänomenologischen Philosophie
- (8) S. 71 (9) S. 73 (10) S. 75 (11) S. 74
 - (12) S. 77 (13) S. 80 (14) S. 86 (15) S. 87
 - (16) S. 88 (17) S. 91 (18) S. 92 (19) S. 93
 - (20) S. 94 (21) S. 184 (22) S. 101 (23) S. 36
 - (24) S. 286~287

(筆者) 東京都立工業短期大学〔哲学〕助教授)

前	号	目	次
		価値の経験論的解釈と超越論的解釈	芳夫
		教育的認識の構造(未完)……………源	了円
		プラトン第七書簡の謎……………長坂	公一
彙	報		

M. S. Handman, G. Ichheiser, and L. D. Greenberg. Above all, I am inclined to appreciate the theories of the former two scholars. As a result of review about the scholars, I present here three types of nationalism as ideal types as follows: (1) nationalism in the Western world, (2) nationalism analogous to that of the Western world, (3) nationalism in the Asian world.

The basic assumption underlying our typology, though they may overlap each other to a certain extent, can be concluded as follows: nationalism (1) corresponds to that of advanced countries, nationalism (2) to that of middle-developed countries, and nationalism (3) to that of under-developed countries.

The scientific study of nationalism must be established beyond the knowledge of specific cases and at the same time by avoiding lumping together all instances of nationalism. The full understanding of the characteristic forms of these three, we believe, enables us to get the correct knowledge of nationalism prevalent in each area.

Über die äussere Wahrnehmung

von Masaji Okada

In diesem Aufsatz wird eine Beantwortung der Frage versucht, die lautet: sind wir uns überhaupt in der sogenannten äusseren Wahrnehmung unmittelbar der Aussenwelt, d. h. hier der äusseren Dinge selbst bewusst? Die Antwort: die äussere Wahrnehmung ist kein unmittelbares Bewusstsein von der Aussenwelt selbst.

Die Antwort kommt aus einer Betrachtung des folgenden Sachverhaltes. Die äussere Wahrnehmung ist nämlich die von einer ausser mir liegenden Welt. Dieses "ausser mir" bedeutet aber die "Tiefe" im Sinne der "Weite hinaus". Die Wahrnehmung einer solchen perspektivischen Tiefe wird uns jedoch niemals in der Wahrnehmung des bloss räumlichen Verhältnisses von "Aussereinander" gegeben. Dies ist aus derjenigen unbestimmten, doch von einer Art der Raumvorstellung begleiteten Gesichtswahrnehmung zu ersehen, die auch dann bleibt, wenn wir die Augen schliessen und so alle äussere Wahrnehmung verschwindet. Andererseits ist das, was wir an

der Aussenwelt wahrnehmen, kein "Nebeneinander" von Teilen jener Tiefe, obwohl sie im objektiven Verhältnis der räumlichen Entfernung allerdings auch nebeneinander liegen. Die Aussenwelt wird, mit einem Worte, von uns so wahrgenommen, wie sie erst in einem "Durchblick durch die Tiefe" zum Vorschein komme. In diesem "Durchblick durch die Tiefe" erscheint uns jeder Teil von ihr nicht im Verhältnis des "Nebeneinander" sondern sozusagen in einem Verhältnis des "Übereinander" oder "Hintereinander". Gesetzt, dass wir die Teile jener Tiefe nebeneinander sähen, so wäre es unmöglich, dass unser Bewusstsein in der Weise des "Durchblicks durch die Tiefe" zustande kommt. Dann würde es ebenso unmöglich, eine Unterscheidung zwischen der Wahrnehmung des "Aussen", d. h. jener "Tiefe" und der des bloss räumlichen "Nebeneinander" zu machen.